

令和6年度森林吸収源インベントリ情報整備事業 中国・四国ブロック現地講習会報告

開催日：2024年6月6日（木）

時間：8時30分～17時00分

場所：広島県三次市（格子点ID：340290）

受講者：（株）一成（4名）

講師：稲垣善之（責任者）、志知幸治、細川奈々枝（森林総研四国支所）、山下尚之（森林総研立地環境研究領域）

場所の概要：人家の裏山に位置する民有林でヒノキが生えているものの広葉樹が優占する。中央杭は尾根にあたり、概ね南北方向が尾根を横断、東西方向が尾根を縦断するような配置となっている。中央杭周辺には礫が見当たらなかったが、西側地点の杭周辺では地表面に20～30cmほどの礫があちこちに見られた。

講習会概要：経験年数2年以上の受講者を対象に講習を行った。根株測定時の地際位置や、測定時に野帳記入者と測定者が値の妥当性を考える習慣をつける事、野帳確認では記載漏れや字句の読みやすさなどについて再確認する事を重点的に講習した。また、枯死木調査の目視での樹高測定は、森林生態系多様性基礎調査の報告書を見ておくと参考になることを伝えた。西側地点と南側地点には巨礫が埋まっており、円筒採取が不可能なためブロックサンプリングを行った。

指摘事項：

- ・ 土壌断面調査では、地表にある直径5cm以上の枝は、分解度が5程度と腐朽が進んでいても、断面記載では枯死木であることを記載し、枯死木調査とのダブルカウントを避けるため、堆積有機物採取では太さが5cm以上の枝は採取しないよう指導した（写真4の赤丸部分）。
- ・ V（円筒）はどれくらい断面の幅を広げて試す必要があるかという質問があった。本事業では10年毎に土壌採取を行っており、重複を避けて今後の採取地点を確保する必要がある。そのため、指定された断面幅と最大で+10～20cmの範囲で再度円筒を試し、難しい場合はVB（ブロックサンプリング）で実施すればよいと指導した。
- ・ V採取の際に円筒から礫がはみ出た場合、円筒内の礫体積と同じ大きさの礫を入れて採取するよう指導した。定積細土重の計算に礫は用いないが、礫が入っていることで土壌の三相組成を計算することができ、データチェックに活用しているためである。

全体講評：

今期事業が4年目となり、講習会の際には担当者の熟練度が増したことを実感した。全体的に丁寧に作業してくれている印象だった。カテゴリ-Aでも通常2名で調査をしているとのこと、かけられる人数が少ない中で工夫されているとは感じたが、無理なく作業を行い、怪我や事故のないようにしてもらいたい。



写真1 出発前の荷物の確認作業



写真2 東西南北のラインを引く様子



写真3 枯死木調査の様子
高さの目視は少し離れた場所から行う



写真4 断面積の50%以上が地表に出ている枯死木(赤丸部分)



写真5 西地点で出てきた巨礫



写真6 西地点の土壌断面



写真7 土壌断面の作成
堆積有機物を汚さないための工夫が見られる



写真8 最後の試料確認